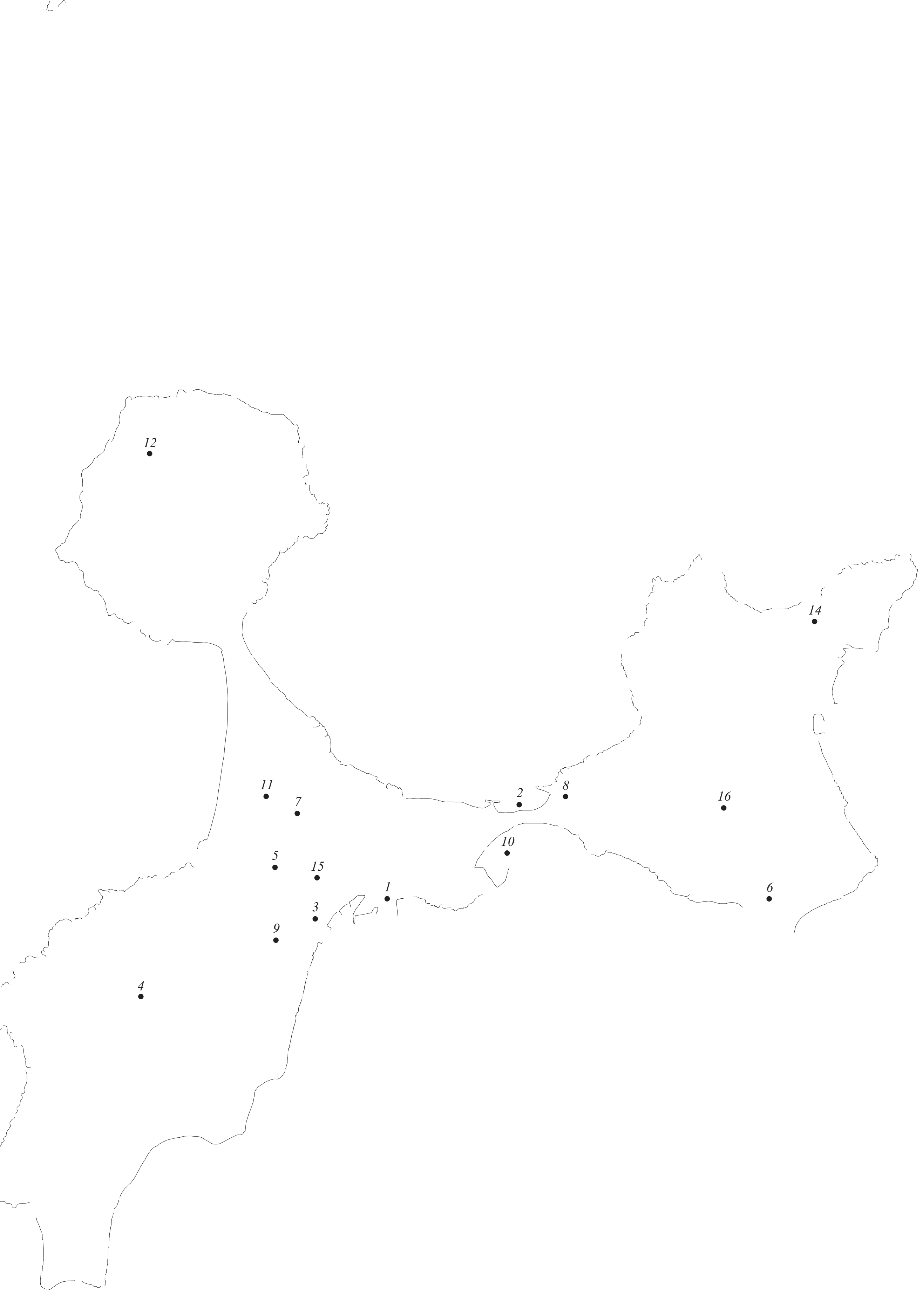
雲もみな浪とぞ見ゆる海士もがないづれか海と問ひて知るべく

（紀貫之著「土佐日記」より）



目を覚ますと海に浮いていた。ゆりかごのような舟の周囲には靄がかかり、目をこする。足下から彼方に続く波はどこからか雲となって低い空を形成している。

そんな夢を見た。

1 コーラ
海ほたる
2 中新田の海

ある時、自動販売機でコーラ（330ml缶）を購入し、自転車に乗って東に向かっていた。あてはなく、ただ、コーラを飲む場所を探した。どこで飲んだって良かったし、何よりこの時、身体は炭酸を欲しがっていたので、どんな所で飲んだって美味しく飲めたと思う。それにどういう場所で飲めば、より美味しいというようなイメージがあったわけでもない。それほど考えて動いてはいなかった。「海ほたる」の文字のある看板が目に入り、自転車を漕ぐ足を止めた。海ほたるはこの島の観光の目玉の一つ。その海ほたるが美しく見れるという砂浜で、私はコーラのプルタブを開けた。プシュ。この浜は陸繋砂州であり、道の両側に海がある。

幅250メートル程の砂浜の端で耳を澄まし、目を凝らす。「ズサーン」という波が浜で砕ける音は単調でなく、40センチから6メートル程度の塊ごとに、位置が違い、時間差があり、なかなかに複雑に響いていた。50メートル程、遠くに離れた場所の音も私は聞く事が出来た。目視した塩水が砂浜に侵蝕する事で起こる白波と、耳に届く小さな音のタイミングの一致から、波音の発生位置、或いは白波が出力した音の見当をつけた。私はその小さな音だけに焦点を絞って耳をそばだてる事が出来た。近隣の大きな波音は風に混じって霧散し、離れた場所の小さな音はひそやかさを超えて体内に染み込んだ。

帰り際、砂浜からアスファルトの道路に戻り、反対側の海に視線を放した。そこでは不気味な程、音がなく、時間が止まってしまったかのように、波が静止していた。波止場を歩き、覗き込んで、その海の深さを確かめていると、ようやく、非常にゆるやかながら、確かに海の表面は動いており、微かながら音を発している事が分かった。

3 粟島海洋記念館

意表を突く、明るいエメラルドグリーン色をした外壁をもつこの建造物はいつも、まるで正月のように凛とした空気を内包する。一階のいくつかの部屋には昔の船舶機器や模型等の資料が展示されている。元々は海員養成学校だった。明治30年（1897）創立。日本最古。

窓に取り付けられていたガラスは、大正時代当時の物であるらしい。一枚一枚は真っ平らではなく、風景を歪ませる。どこか、自信を持って景色を歪ませている。その佇まいに、肉厚のガラスをイメージするが、触ってみると、びっくりするほど薄い。思わずその手を窓から離した。

瀬戸内海歴史民俗資料館
丸木舟
4メートルの神棚

【兪（ゆ）】という字は、木の中身をくり抜いた丸木舟を表す。そこからまた〈じゃまな部分を抜き取る〉という意味がある。（参考「漢字源」学研）左側に口をつけた文字【喩】（喩える／たとえる）は疑問やしこりを抜き去ること。そして、【癒】（癒す／いやす）の原字である【愈】は、心から心配の種を抜き取ってすっきりすることを意味する文字らしい。

香川県高松市と坂出市の境あたりにある瀬戸内海歴史民俗資料館。ここで私たちは実に豊富な瀬戸内海の漁具や和船の展示物、資料に出会うことができる。異文明を思わせる建築も含め、特筆すべき見物は数多いが、後半の会場で出会う巨大な丸木舟、これだけでこの資料館に赴く価値はあると思う。刳船（くりぶね）ともえぐり船とも呼ぶらしい。秋田県男鹿市で収集されたもので、全長5メートル88センチ、幅66センチ、深さ99センチ。丸木舟は、棚板構造の船が発達した瀬戸内では比較的早くに廃れてしまったため、出土船以外には残っていないらしい。

この瀬戸内海歴史民俗資料館に保管、展示される横幅4メートルの黒く大きく立派な神棚は、粟島の、もともと回船問屋だったというお宅から渡ったもので、2012年の夏、私はその取り外し現場に居合わせることが出来た。数人がかりで声を掛け合い、慎重に、段取りを幾度も確認しながらの作業。神棚の裏手からは一匹のネズミのミイラが発見された。

4 城山を登る
5 詫間町立粟島小学校プール

城山（じょうのやま）登頂ルートの入り口に向かう途中、詫間町立粟島小学校（休校中）があり、また、その校舎の脇の細い道を挟んで、二五メートルの屋外プールがある。私がここに初めて訪れた2012年4月、底が見えない深い抹茶色の水に、不潔なイメージはなかった。6つある飛び込み台の内、第3、第4のコース台の上に真っ黒い大ぶりのカラスが1羽ずつ立ち、前方（対岸）を見つめていた。互いを見るわけでもなく、フェンス越しにプールの測道を歩く私を気にする事もなく、ただ2羽のカラスは、随分と苦そうな抹茶色の水面の先だけを見つめていた。

午後4時42分、私は城山山頂へ繋がるやや急勾配の階段を上り始めた。格別濡れてもなく、渇いてもいない、明度は低いが彩度の高い色とりどりの落ち葉の上に桜の花びらが水玉模様を作っていた。

歩き、時折立ち止まり、また、歩き始める。七合目を過ぎて、階段の左右両側に海がある事を確認した。私はこの山の輪郭線を歩いていた。途中、左側に観音様道との分岐点があり、右側の海の向こうには、浅い三角錐の阿島山が見えた。

八合目を過ぎた辺りで階段は右、左、右、左、と折り返しが多くなり、勾配もいくらか厳しくなった。そうして歩き、立ち止まり、歩き、九号目を迎え、山頂に到着したのが5時5分。山頂は二段階あり、一つは東屋が見晴し台として機能し、この粟島特有の景色を一望出来る。近海に走る二つのボートが立てる波がそれぞれに、岸に向かう波とは別の方向に斜線を描き、モアレを生じさせていた。

東屋からさらに斜面を上がると山の最高部となる。最高部には標高222・08メートルと書かれた標識がある。東屋との高低差は10メートル程度だろうか。ここで私は持って来ていたお茶を思い出した。それまでの道中、すっかり忘れていた。飲みきれずに冷めた前日のヤカンの緑茶を、ペットボトルに詰めたものだ。ぬるく、やや濃すぎるそれを私は山頂で全て飲み切った。

上りよりも下りの方が、階段を含む風景を広く視界に入れる事が出来た。階段のどこにでも桜の花びらが落ちていたが、桜の木そのものを確認していないと思い、立ち止まると、周囲に桜の木が多い事に、ようやく、気付いた。この時期、桜の木に花びらは視線の遥か上、山の表面にのみ残っているようだった。

5時40分、階段を下り切り、再び、小学校のプールの測道を通りかかった。2羽のカラスは、今度はプールのフェンスを、並んで掴んでいた。レースを終え、互いの勇姿を讃え合っていたのかどうか。

6 不天

中新田から上新田へ向かう道路から脇道へ逸れ、思わず運転している自動車の性能を危惧するほどの急勾配を、ぐぐぐぐっと、下る。そこには急角度の延びる浜がある。

百々手祭 I
7 粟島神社
8 馬城八幡神社
9 梵音寺の大師堂

粟島を含む西讃地方を中心に香川県内のほぼ全域で営まれる百々手祭（ももてまつり）は、弓を射ることで厄よけなどの祈願をする行事である。現在は簡略化されているが、少なくとも1960年頃までは、頭屋、副式頭屋と定められた家二軒にて、それぞれ6人ずつ、合計12人の射手が祭までの一週間の間暮らし、女断ちをし、お宮参り（粟島神社、馬城八幡神社、梵音寺の大師堂）をし、海水を浴びて身を清め、祭に備えたとのことを聞いた。当時は旧暦の2月朔日を開催日としていたが、現在は島に帰って来る人への配慮などの理由で、新暦の3月の第一日曜日としている。

私は2013年3月2日、3日とこの祭に出掛けた。2日昼からは射手6人vs6人の対抗戦が行われ、1人24枝（2本で1枝、合計576本）の矢が射られた。また、この年は2人の新参（しんざ＝新人）がいたため、夜7時頃より、新参の儀式が行われた。新参が古参の叩く太鼓に合わせ、新参の舞を踊ったのだ。「しんざのまいをみいさいや」「しんざのまいをみいさいや」「しんざのまいをみいさいや」

3月3日、晴天。粟島では現在も12人の射手が、この一日でなんと合計1008本もの矢を射る。その一部は「射った事とする」そうした儀式も祭の作法として組み込まれているため、実際に放たれる矢は1008本よりやや少ないが、朝8時前から夕方4時過ぎまでの長丁場、和やかながらも緊迫した祭の時間が確かにそこにある。思い思いの祈願（厄よけや健康、豊漁など）が、弓の的とされる日の丸の扇に書き込まれ、祈願者が奉納する酒や米、海の幸や布団を、その扇を射抜いた射手が獲得することになっている。的は真ん中に近いほど、当たれば晴れやかに、大きな音を響かせる。その日、矢が放たれるたび、観客から高かったり低かったりの歓声が上がり、溜め息が洩れた。12人の射手は身に纏った裃（かみしも）の片腕を、矢を射るために脱いでいる。彼らの目の前には暖を取るための火鉢とお神酒。的までの距離は28メートル。これは弓道の競技用として定められた距離である。

上記の扇以外に、36本の葦で出来た大きな「八幡的」、三尺の菱形をした「荒神的」、そして「毘沙門」、「神の的」が、昼前に射られる。この「神の的」が射られるまでが「神事」とのこと。

ひときわ年季の入った裃をつけた、元船大工である昭和五年生まれの射手は、「まだまだ口は立つが足が立たん」と1人椅子に腰掛けながら矢を放った。射順は12番手。深い皺は、長い時間の悲喜交々の折り重なりに見えた。山なりの矢は的まで届かないこともしばしばで、命中率も高いとは言いがたかったが、暖かかった日差しも傾いた夕方、彼の放った2013年の粟島百々手祭、最後の1008本目の矢先が、キュ――と吸い寄せられるように的の中心に突き刺さった。にごりのない澄んだ空気が、射場と、射場にいた全員の体内に流れ込んで来た気がした。この一瞬の間をおき、その日一番の拍手が空に響いた。

百々手祭 II

フリーペーパー「リビングたかまつ」（2013／2／23号）の香川県に残る祭や神事を紹介する記事では、〝多くの手〟ではなく〝多くの実り〟が「百々手」の名の本来の由来ではないかと書いている。遅く成熟する稲のことを晩稲（おくて）と呼ぶと同様に、「百々手」の「て」は稲を意味し、また古代、穀物の収穫サイクルを一年として考え、「稲」を「とし」と読んだ経緯からも、「百々手」は一年の豊作祈願を意味するとのこと。

静けさの中で弓の弦をはじくと「ぶうん」という、えも言われぬ神秘的な音が響いて―。それが田畑を荒らす動物を退けるだけでなく人間に降りかかる様々な災厄もはらうとされてきました。そのため、的を射る射手は神人であり、潮で身を清め、裃（かみしも）の礼装で威儀を正して行うのだそうです。（リビングたかまつ 2013／2／23号 香川の祭時記3より）

この説がすなわち粟島にも該当するのかどうかわからないが、少なくとも粟島の裃をつけた射手はやはり神人であり、かつては一般の人が射手とすれ違う際には道の端を歩いたとのことだ。

他方、この「リビングたかまつ」の記事は、私が以前、粟島とは別件で調べ辿ったある字の由来を私に想起させた。太古の人々が草野に捨てた故人の骨を、肉体が風化した後、取りに行く際に矢を放ち、亡骸を荒らす鳥獣や邪霊を追い払った事から【弔】という字が出来たという話だ。（参考資料「常用字解」白川静 著／「原始日本語はこうして出来た 擬音語仮説とホツマ文字の字源解明に基づく結論」大空照明 著）

10 ボラ

2012年5月10日、正午。元粟島郵便局長である高齢の男性からボラをもらった。導かれるままお邪魔したその男性が所有する船の上で、前日の釣果であるらしい五匹のボラを見せてもらった。その内の、最大と思われる一匹を彼は、甲板に引きづり出した。思い通りにさせるものかと、そのパンパンに張った太い胴体を揺さぶるボラの抵抗は、甲板では無力そのもの。身体を床に叩き付ける強い、乾いた低い音は眠気を誘った。

ボラは、アイスピックの先を曲げたような、尖った金属製の器具で後頭部を一突きされると、大量の濃ゆい血を、どくどくと噴き出した。おとなしくなった彼にコンベックスを当て、計量器に乗せると、体長73センチ、体重3600グラム。「一貫弱やな」そう、元郵便局長は言った。

そうやって死んで、刺身用、焼き物用、煮物用と分断されたボラをもらい、その晩食べた。全く臭みを感じさせないその薄ピンク色の身は、肉食系の分厚い迫力を持って私の身体と対峙した。この日の酒は「川鶴」。香川県観音寺市の酒。

11 亀

2012年5月、西浜に向かう道中、道路の真ん中で、黒いボテっとした塊に目を留め、運転していた車のブレーキを踏んだ。近づくと大きな、体長35センチほどのミドリガメだった。いずれ轢かれてしまうのではと、ズッシリしたその胴体部を両手で掴み、脇に避難させる為に持ち上げると、亀は太い手足をバタバタさせ、勢い良く小便を垂らした。ここが浦島太郎発祥の地であることを思い出させた出来事。

精霊舟

粟島には、『新盆に、灯籠とお菓子や果物のお供物を乗せた木製、或いは藁で出来た小舟を西に向けて海に流し、故人を偲ぶ』という風習があり、今もそれは形を変えながらも残る。対岸の須田でもかつては、藁で出来た小舟に灯籠とキュウリ等のお供えを乗せ、海に流していたらしい。この風習について知ってから、私は波を掻き分け航行する舟について、そして浜辺から見るその小舟が徐々に小さくなって行く時間について、ことあるごと、想像を巡らせていた。

お盆とは和暦の7月15日を中心に行なわれる祖先の霊を祀る行事を指すが、一概に仏教の行事というわけではなく、Wikipedia は「古神道における先祖供養の儀式や神事を、江戸幕府が庶民に強いた檀家制度により仏教式で行う事も強制し、仏教行事の「盂蘭盆」（うらぼん）が習合して現在の形が出来た」と説明している。

2009年2月、名古屋市北区の平手町遺跡から日本最古、弥生時代中期後半（約2000年前）の舟形木棺が発見されている。内部には人骨の破片や歯が残り、船尾に頭を向けて遺体が置かれており、近くの墓からも同様の舟形木棺が発見されたが、いずれも船首が北西を向いていたとのこと。当時の中日新聞（2009／2／23）で同志社大学教授（古代学）の辰巳和弘氏が「舟形木棺に託した思いはお盆に故人の霊を船に乗せて海に流す「精霊船」につながっている。古代人の心が現代人にも生きていると言える。」と話している。

「海から見た日本人― 海人で読む日本人の歴史」（後藤明著／講談社）によれば、このような舟形の棺は、古墳時代になるとより広範囲で発見されており、その起源は、さらに太古、巨大な舟形・丸太彫り木棺群（約2500年前）が発見されている中国におそらくあると言う。また、東南アジアやヨーロッパ等での事例を様々紹介しており、インドネシアのスマトラ島トババタク族の船型棺について、以下の記述がある。

> トババタクの船型棺は船首にサイチョウが象られ、先頭の人物は鉄砲をもつ。サイチョウは森の中でもっともけたたましい声でなく鳥であるゆえに、魂が雲の中を天の世界へ昇るときに邪を払うと考えられている。鉄砲をもつ人物も同様で実際に死者儀礼のときは鉄砲を撃つが、これは戦後の風習で、もともとは太鼓などを打ち鳴らしたらしい。

12 阿島山／三十三観音道
13 二面島

2012年5月、阿島山の三十三観音道と呼ばれる山の中腹をぐるりと回る登山道を歩いた。山頂には行っていない。その名の通り、山中33カ所に配される観音を巡る山道である。スタート地点は、南北に長い西浜の北端。ここを入って道なりに、さらに北に進んで行くと、東西に道が分岐するが、西側に第一番の像が並び、また、「順路」の表記がある。第一番には4つの舟形光背が並んでいる。

道は悪くない。どちらへ向かうべきか、迷う事もないし、概ね足場はしっかりとしていた。道が悪くないという事は、誰かが整備を遠くない過去において行った証である。ただ、スタートからゴールまで、やたらと蜘蛛達が道を横断するように巣を構築しており、私は顔を前方ではなく下方に、頭の先を矢面に立たせて、進まざるを得なかった。だから、山中の景色の記憶のほとんどは地を這っている。私は歩きながら、TVアニメ『未来少年コナン』（1978・NHK）のコナンとコナンの親友ジムシィが初めて出会い、にらみ合い、2人で山をかけずり回ったシーンを思い出していた。

阿島山の道は、爽やかなハイキングよろしく平坦かと思えば、突如として勾配がキツくなり、上りではゼイゼイ、下りでは早足になったその勢いを沈められず、半ば強制的に20メートル程走らされ、ヒヤヒヤさせられた。黄土色と薄緑色で構成された景色は何故か渇いて映ったが、私の服の下の湿度はめっぽう高く、体中が汗で濡れていた。下を向いて歩いていると足先から50センチ前方、左から右へ何かが飛んで行った。随分と低空飛行。蛇か？

第一七番から40歩ほどの地点で木々が低くなり、目の前に海が広がった。久しぶりに喉の表皮を伸ばして、彼方を望むと、二面島（ふたおもてじま）が見えた。この島を「こけし島」と呼んでいたらしい話を聞いたが、どれだけの範囲で使われていた言葉かは知らない。確かに、島の主たる塊は、水面にこけしが仰向けになって浮いているように見えなくもなかった。

二面島は南西から北東に長く、阿島山のこの位置からだと、島の特徴的な起伏がよく分かった。Google Map を見ると、私が見ていた二面島の端から端までの長さはだいたい150メートル。立っていた場所から二面島までは、だいたい1.5キロメートル。ここでは、1.5キロメートルの距離と、1.5キロメートル先の150メートルを見ることが出来る。二面島は仲多度郡多度津町。粟島は三豊市詫間町。

14 塩谷

観光に訪れた誰かが言った。「ここは楽園？」

15 粟島中学校図書室

粟島中学校（2006年休校）の図書室には、昭和62年（1987）に90年間の長い歴史を閉じた粟島海員学校の蔵書が多数、紛れ込んでいた。海員学校が閉校した際に、当時の粟島中学校の図書担当教員が本を選抜し、持って来たとの事を、この学校で校長を務めていた人物から聞いた。そうした海員学校の元蔵書が、中学校と同じように休校している粟島のもう一つの学校、粟島小学校の図書室にも眠っているのではないかと思い、頼んで小学校の図書室を覗かせてもらったが、海員学校の元蔵書がないどころか、驚く程に本の数は少なく、そこはただ、黄色い昼の光が差し込んだ、寂しい部屋だった。小学校が稼働を止めた際、どこかの学校の図書担当教員が持ち出したのかも知れない。

粟島中学校の図書室には、実に様々な文学全集、百科事典、郷土資料やハウツー本が並んでいた。年月を経た美術画集の印刷は、撮影された対象たる実物とは全く関係なく、独立した絵画として、いずれも某かの感情を引き出した。「ジュニア博物館」という1970年代初頭に発売されたらしいシリーズの内、『2001年の世界』と題された本には、2001年には、東京・ニューヨーク間を二時間で結ぶ超音速旅客機が登場し、また、気象を自在にコントロールする事が可能になっているというような話が、「二一世紀のこんにちでは…」という語り口で繰り広げられていた。このシリーズの外箱には「この本は小・中学生のための最新知識シリーズである。つぎつぎに展開する興味深い話題と美しい写真図版は限りない夢と探求心を少年少女の心に育んでくれると思う」と、シリーズを賞賛する言葉が掲載されていた。確かに。

海員学校からやって来た本には、流石にと言うべきか、船舶や海に関するものが多い。『帆船賛美』と題された1983年に行われた大阪世界帆船まつり公式記録写真集、『日本の海の歌』、『総帆あげて』、『わかりやすい海事知識』、『犬と私の太平洋』、『北前船と下津井港』、『練習船航海記』、『海ひと筋に』、『ヘイカチの航海記』、『港みなとミナト』、『日本の海一〇〇選』『鯨部隊奮戦記』その他いろいろ。『粟島とわたし』なんていうのもあった。

また、図書室には、教員向けの本、例えば『中学数学の授業』とか、『国語科基本的技能の指導』、『学校管理法』があるかと思えば、『週間ヤングジャンプ特別編集 ぜんぶスターウォーズ』があり、「キンダーおはなしえほん」シリーズ、「推理・探偵傑作シリーズ」、『新・平家物語』、『二宮尊徳翁全集』が並んでいた。辞典・事典・図鑑の背表紙を見ているだけでも楽しかった。『社会科事典』、『生徒指導事典』、『園芸大百科事典』、『生物学辞典』、『俳句鑑賞辞典』、『教育心理学事典』、『原色現代科学大事典』、『飲食事典』、『日々の研究事典』、『少年少女学習百科大事典』、『現代天文学事典』、『世界児童文学事典』、、、。私は毎日、それら背表紙の風景を眺め続けた。開いて内容を僅かでも知れた本は数えるほど。何枚も何枚も写真を撮った。そうして、私から整理の欲求は消え失せた。如何なる整理の矛先も、何を刺突する事はなく、また再びそれは、ただ、べとついた埃を身に纏い、錆び付いて行く事がわかったのだ。

16 紫谷山

2013年3月、島のある男性から、山頂まで登る道を作ったとの話を聞き、一人、麓まで自動車で向かったが、さて、どこが入口かわからない。聞きそびれた。ここかと思った草むらから山に入り、鎌を片手に草をかき分け、とにかく上へ上へと歩を進めた道は道なき道だった。振り返ると、自分が上って来たついさっきの記憶さえ、勘違いのようだった。私はコワくなって真っ直ぐ下に向かって駆け下りた。ふたたび同じ男性に会ったのはその3ヶ月後、もうその時分、山はマムシで危険だと言う。次のチャンスは10月か。

essay + drawing : Hajime Mizutani | design : Yuta Nakajima (doma Design Room) | 2013